

近代日本における実業家文化の変貌 —安田善次郎を中心に—

永 谷 健

共通講座教室人間社会科学講座

(2002年9月6日受理)

Transformation in the Entrepreneurial Culture of Modern Japan

Ken NAGATANI

Department of General Studies (Humanities & Social Sciences)

(Received September 6, 2002)

This paper traces the transformations that occurred over time in the culture created by entrepreneurs in modern Japan, from the Meiji era through the Taisho era and on into the early Showa era. The following points are especially noteworthy. Firstly, the involvement of entrepreneurs in the first half of the Meiji era in receiving important visitors from overseas and in Japan's exhibitions at world expositions held overseas proved to be opportunities for the creation of what could be termed an entrepreneurial culture. Secondly, entrepreneurs with highly conscious of the speech, behavior, and culture of the nobility, powerful politicians, and the imperial family, and made active efforts to incorporate these into their own daily lives. Finally, in order to win over and retain economic trust in the business sphere, entrepreneurs made use of such social functions as banquets, tea parties, and garden parties in a variety of ways. This paper examines these points by surveying the social milieu surrounding Zenjiro Yasuda as a typical entrepreneur in early modern Japan.

1 はじめに

明治期から大正期にかけて、実業家の社会的地位と社会的威信は飛躍的に上昇した。彼らへの叙位叙勲や爵位の授与がこの期間に幾度となく行われたこと、そしてまた、彼らが権力ある役職にしばしば就任したことを想起すれば、そのことは疑う余地がない。徳川期における商人身分の劣位からすれば、この上昇は、階層秩序内部のあらゆる序列移動のなかでも群を抜いて際だっていると言えよう。ただし、上昇移動の正当性が制度的に保証されていたとしても、新興階層に対する社会意識や文化的な序列といったものが、それと連動してただちに改変されていくというわけではない。この時期、地位や威信をめぐる制度レベルの序列と文化レベルの序列とのあいだに生じたある種の軋轢が、実業家の言動や彼らの生活世界に大きな影響をもたらした。明治前期、新興著しい実業家たちが積極的に人事交際（いわゆる社交）に精を出したのは、この点と無縁ではない。新参者である彼らはアップークラスの文化を追い求め、名実ともにアップークラスの一員になろうとしたのである。

この論考でもに取り上げる安田善次郎は、アップー

クラスの文化へと積極的に近づき、それを摂取し、自らの子弟に相続しようとした。『安田善次郎傳』の著者、矢野文雄は、そうした安田の戦略的な行動を明確に指摘している。

「子弟の教育も、学芸よりは寧ろ商売の実際に親しましめ、…右は当時の商家一般の風習にて氏も亦此の如く其の親戚一門の子弟を教養するの方針を取り、…然るに一門の子弟等は、自然と世の変遷を覚知し、…中学及び高等教育にまで進まんとするの切望懇願をなす者多きに至れり、是に於て氏も已むを得ず彼等の請求を許可して、高等教育を受けしむる事とし、茲に氏の子弟教育法も遂に変更を生ずるに至れり、又彼等が成長するに従ひ、自然に下品なる音曲遊戯に踏迷ふを予防せんが為め、氏は彼等を強制して、謡曲及び茶の湯を習熟せしむるを常とせり、人性は元と無味乾燥に甘んずるものにあらず、何等かの遊戯遊芸を以て其の心を楽ましめざるを得ざるものなり、氏は此の人性の微妙の点を覚りしが故に、其の子弟をして、音曲遊芸に楽しむの道を得せしめ、無難なる方面に彼等を誘導せんと企てた、故に氏の門族に生れたる子女は、何人も皆謡曲及び茶の湯に堪能ならざる者なく、其の中には、まゝ、玄人の墨を摩する者すら之れあ

るに至る、氏が心を教養に用ふるも亦至れりと云ふべし、…」⁽¹⁾

あとで見るように、安田自身、茶事、謡曲、あるいは馬術といった芸事・習い事に、明治の比較的早い時期から積極的に手を染めていた。子弟の教育について、「下品なる音曲遊戯に踏迷ふを予防せんが為め」、あるいは、「無難なる方面に彼等を誘導せん」という安田の方針や配慮は、彼の文化的な戦略を象徴している。安田はこうした文化的な対応が素早く、かつ、その作為性が際だっていた。そして、他の明治期の有力実業家も、何らかの形でほとんどの者が彼とよく似た対応をしていたと考えられる。

安田の場合、一代で財閥の基礎を築いたことが、露骨な戦略性に結びついたとも言えるであろう。彼は富山の士分、四代安田善次郎（のちの善悦）の三男として生まれた。父の代に、貧乏な半商半農の生活から脱して、富山藩士の末席に列することが認められた。子・善次郎は、少年期の青物行商と写本の日々を経て、江戸へ出た。玩具商の店員、両替商での奉公を経験した彼は、やがて独立して両替業を開業し、その後の安田商店・安田銀行へと、金融を中心に業務を発展させていく⁽²⁾。安田は古河市兵衛や大倉喜八郎らと同様に、一代で財閥の当主となった人物である。これにたいして、三井家や住友家は、徳川時代から続いていた大商家を継承し、経営体制等を近代化させることにより、明治期財閥の当主へと成長した。三井家・住友家は徳川時代から茶事等の文化に嗜みがあり、いわばハイカルチャーとの距離はそれほど大きなものではなかった⁽³⁾。安田らにはそうした距離をつめるハンディがあった。大官・貴紳に近づき、彼らの文化に敏感になればなるほど、上昇した社会的地位にふさわしい文化の受容をめぐる、積極的な情報収集と戦略的思考の活性化が必要になった。

安田は同世代の実業家たちのなかでも、断然、ハイカルチャーに敏感であった。ハイカルチャーにおける彼の足跡をたどれば、その時代の実業家たちの生活世界の一端と、近代日本のハイカルチャーの特質に触れることができる。この論考では、安田自身による手記などを素材に編集された『安田善次郎全伝』（私家版）という詳細な記録をおもに参照しながら、安田という一人物のライフヒストリーを、可能な限りミクロな視点で構成していく。次節では、まず、ハイカルチャーの揺籃期、明治10年代の状況と安田の対応を概観しておこう。

2 実業家文化成立の時代と安田善次郎

明治10年代初頭は、実業家文化と呼びうるものの核が成立した時代であった。そうした核の成立を促した要因

はいくつかある。ここではそのなかでも重要なものを数点挙げながら、実業家文化の揺籃期にあたるこの時期の時代背景、および、安田によるハイカルチャーの模索の跡を概観しておこう。

(1) 外国貴賓来日と実業家

明治10年代前半、海外からの貴賓の来日があいついだ。政府は貴賓をもてなす場所と方法を、急いで決定しなければならなかった。なかでも、香港鎮台（香港知事）ヘンネッシー夫妻の来日によって、政府は、海外からの貴賓の接待には実業家の協力が不可欠であるという認識を強めた。

ヘンネッシーは、明治12年6月7日、日本の商工業の視察を目的に来日した。当時、香港は日本の重要な貿易地であり、そこには三井物産会社の出張所もあった。6月9日、政府は氏を官邸に招待し、楠本東京府知事を筆頭に在京有力実業家（渋沢栄一、益田孝、岩崎弥太郎、三野村利助等）、その他、主客16名で、懇親の小宴会が催された。その後、東京商法会議所訪問（6月13日）、新富座の観劇、三井家の深川別業への招待など、氏への歓待は多彩をきわめた。とくに創立間もない東京商法会議所への招請は、時の実業家たちには記念すべき盛会となった。そこでは、渋沢栄一が歓迎の辞を述べ、また、益田の通訳により、ヘンネッシー氏が東洋貿易の隆盛を演説したと伝えられる⁽⁴⁾。ただし、こうしたヘンネッシー夫妻への歓待は、その直後に来日したアメリカ前大統領、グラントへの接待に比べれば、その予行演習の規模であったと言ってよい。グラントは同年6月21日に長崎入りしたあと、7月3日に横浜に到着し、以後、さまざまな歓待を受けている。なかでも岩倉具視が日本固有の芸能として能楽をグラントに見せたことが、その後の実業家たちのハイカルチャーへの関わりに影響を与えたことは銘記すべきであろう。岩倉が延遠館にグラントを招いたとき、グラントは次のように岩倉に尋ねたという。「具視二問テ曰ク貴国ニハ固有ノ音楽アリヤ」⁽⁵⁾。岩倉が催馬楽・舞楽とともに能楽があると答えたところ、グラントは「一見センコトヲ乞フ」と言った。そこで岩倉は、7月8日、グラントを本邸に招き、能楽師による演舞でもてなしたという。『岩倉公實記』には、「此後具視華族ノ有志者等ト商議シ…能楽ヲ保護シテ之ヲ永久ニ伝ヘンコトヲ図ルト云フ」とある。

安田はグラントの来日に深くかかわっている。グラント来日の一ヶ月以上前の6月27日、府会・商法会議所・区会等の各議員であった安田は、グラントの接待委員のひとり選ばれている。また、岩倉がグラントを能楽でもてなした7月8日、工部大学で行われた夜会に安田も出席している。21日、府会議員、商法会議所議員、十五

区会議長、副議長等が東京府庁に参集し、グラントを天皇に接見させることを決定し、選挙の結果、安田は臨幸の請願委員のひとりに選ばれた。グラント接待に関する所用に奔走し、このとき安田はきわめて多忙であったと『安田善次郎伝』は伝えている⁽⁶⁾。『安田善次郎全伝』には、8月25日、天皇の上野臨幸当日、「善次郎君は齋戒沐浴礼服を着用し、午前八時より出張種々斡旋した」⁽⁷⁾、そして、「善次郎君は無事、此の重任を果したること全く神明の加護によることと感涙に咽んだ」⁽⁸⁾とある。

グラントは9月3日、帰国の途についた。その後、11月12日、安田は府庁に接待委員として決算報告のため出頭し所用を済ませたのち、「府知事の晩餐会に列し、各委員と共に無事終了の祝詞を交換し頗る愉快な一夕を過ぎた」⁽⁹⁾。府会議員等の役職に就いていたとはいえ、実業家安田としてはまだ安田商店の時代であり、経営規模も明治中後期の安田銀行とは比較にならず、貴紳との臨席体験は、安田のハイカルチャーへの強いアスピレーションを覚醒させたであろう。また、安田は翌年6月16日から、宝生流謡曲の稽古を始めたとされるが、彼がグラントへの能楽接待という、ハイカルチャーをイメージさせる象徴的な出来事に感化されたと考えても邪推ではあるまい。

ハイカルチャーへの接近という点では、この頃、安田はあらゆる分野に手を出し始めたわけではない。後で述べるように、安田はいち早く茶事に接し、茶事はその後、実業家文化の中核を形成していった。しかし、他の実業家とは異なり、安田が茶道具の収集にのめりこんでいくことはなかった。明治後期から大正期にかけて東京の茶事文化の中心的人物となった三井物産の益田孝は、晩年、懐古して、自身が茶道具を含む美術品の収集に懲りだしたきっかけとして、万国博覧会への出品に携わった点を挙げている。

「私が美術をやる〔註・鑑賞するの意〕やうになつたのは、余程古い事である。明治十二年〔註・實は十年〕に佛蘭西の博覧会へ政府が前田正名を代表として日本の美術品を出品すると云ふので、大蔵省から其の取扱を物産会社が命ぜられた。其時私は蒔絵の硯箱を買つたが、其れが私の美術の病み付きである。」⁽¹⁰⁾（〔〕内は編者による註。）

このときの益田の立場や三井物産会社の万博への関わりについては別稿に譲るが、実は安田も、規模こそ異なるが、明治12年12月3日、府庁に出頭し、明治14年開催予定の第二回内国勸業博覧会の日本橋区出品総理の任命を受けている。その折の彼の活動の詳細は今となっては判明しないが、晩年に至るまで、安田は名器と呼ばれる茶器をあまり購入することはなかった⁽¹¹⁾。

ただし、安田が茶道具を買わなかったわけではない。

『安田善次郎伝』には、「書画骨董の売立入札などの会には、必ず行って見るが例である」という記述もある⁽¹²⁾。しかし、彼にとって、名器の蒐集は、ハイカルチャーへの関与という行為のなかで二義的なものだったのであろう。それでは、安田の茶事への関与は、どのような経緯で始まったのであろうか。

(2) 茶事開始の前後

高橋義雄は実業家や財界人に茶事が普及していった端緒を次のように語っている。

「明治六七年頃より東京数寄者間に、瓶茶と云へる簡短なる茶会はあつたが、明治十年西南戦争の終局までは、紳士茶人で公然茶事を催す者がなかつたのである、然るに明治九年頃報知新聞社長で、宗徧流を学び橋場の渡し近くに別荘を持つて居て、茶事を奨励した其人は小西義敬氏である而して益田克徳、安田善次郎の如き、皆此小西氏の勧誘に依つて茶人仲間になつた者である、…」⁽¹³⁾

高橋のように、安田が小西氏の勧誘によって茶事を始めたと、ただちに断定することは難しい。しかし、現在閲覧できる資料から言えるのは、やはり安田、益田克徳、関西では平瀬亀之助といった人物が明治12年、あるいは明治13年ごろから茶事を始め、この時期の茶事復興の一翼を担ったことが、明治・大正期に隆盛を極める実業家の数寄者茶事の嚆矢であった点である。それでは安田にとって、茶事を始める前後でどのような趣味上の変化があったのであろうか。

グラントら、貴賓の来日が相次ぐ明治12年の1月26日、安田は旧友たちと宴会を開いている。安田の手記をもとに、『全伝』はそのときの様子を次のように記している。

「君は少閑を得たので旧友と会し懐旧談を交はさんがために其の人々を自宅に招待して小宴を開いた、列席者は、上野、増田、……の計十九名であつた、ひねもす懐旧談に時の移るを知らなかつた程で君に取りては実に愉快な一日であつた、そして余興には杵屋の長唄並に落語などがあつた。」⁽¹⁴⁾

伝記やその他の資料で、安田と同席した者として記録される人物は、安田の交際範囲を知るための貴重な情報である。その後の安田の華やかな交際記録と比べれば、このときの宴会は近しい者が集うきわめて素朴な会であったことがわかる。長唄、落語などは、その後の安田の交際録から、徐々に姿を消していく余興である。また、2月16日、栃木で安田は画帳、花瓶、書画、風鎮、硯、文鎮、巻物など、かなり多くの調度品の類を購入している。『全伝』には、毛塚氏から283円、伊東氏から64円という支払いの記録がある。これらは、新しい交際のための小物として購入されたものと考えられる。安田は前

年の明治11年8月、東京商法会議所議員となり、12月23日には東京府会議員に当選し、翌年1月16日にはその第一回の議員として東京府会に臨んでいる。この時期を皮切りに安田は多数の公的な役職を拝命することになるが、安田の交際範囲も格段に拡大していく。

そのあと、グラント氏の接待等、先に述べたような安田の飛躍的な地位向上があった。そして、12月1日、本所区横網町田の旧田安邸を一万二千五百円で、西村加納両氏の紹介によって買い受けた。この邸宅は別荘として使用され、その後の安田の社交活動において大いに活用されることになる。安田が初めて茶会を開いたのも、この別荘においてであった。安田が厳密にいつから茶事の稽古を始めたのかを特定するのは難しい。『安田善次郎伝』では、「氏は六七年前から、已にぼつ、其の道を心懸け、其の頃或師匠の家で、氏に逢ふたと云ふ老人さへも存生して居る、然れば以前から已に始めて居たらしい」と記載があるが⁽¹⁵⁾、これも確実なものではない。安田は自身が催した茶会の記録（『松翁茶会記』）を残しているが、その起筆は明治13年1月14日であり、これが日付を特定できる最も古い記録である。

「明治十三年一月十四日、横網別邸に於て始めて客を招き茶会を催す、来客は中井、星野、田中、小杉、海老原、小林、山市、小林さん、由井氏室の諸氏なり、余興廣川たか堅田仲次、杵屋勝代。……」

高橋義雄も言うように、この会では酒宴の余興として茶会が催されたようである⁽¹⁶⁾。実業家茶事に限らず、茶事復興のこの時期の茶会は、いまだハイカルチャーの中心的な要素として認識されていなかったのであろう。安田はさまざまな娯楽に興味をもっており、1月30日には、横網新邸で囲碁会を催している。『全伝』では、「かくの如く近來君は、囲碁、茶事等の雅会を開くことが頻々であつた、そして横網別荘の手入れ、舞踊の見物、骨董品の鑑賞等を楽しんだ」と伝えている⁽¹⁷⁾。

さて、安田の交際範囲は、別荘購入と茶事の開始を機に拡大していく。先に述べたように、安田は11年12月に府会議員に当選し、12年1月より第一回の議員として東京府会に臨んだ。しかし、13年2月23日をもって、安田は府会議員および東京商法会議所議員の辞職願いを提出し、11月1日に府会議員を辞職している。『全伝』によれば、その経緯は次のようである。大火があった市内の区域に火防線を新設し、道路橋梁を改造するための費用を、東京府の公債によって拠出しようという計画が、府知事松田道之たちから提起された。そして、その起債方法取調委員に、渋沢、福地源一郎、沼間守一、大倉喜八郎、三野村利助、益田孝らとともに、安田も選出された。安田は拠出案の修正を要求したが、容れられず、2月22日に府会議員の辞職を決心した。そこで、「別宴

として、午後1時から、安田は、府知事松田、書記官千田、田沼の両氏、福地、沼間の両議長、それに他の議員一同を招待して宴会を開いた。夕刻6時から酒宴となった。安田の手記には、「殊の外愉快の模様にて午後二時より十時に至るまで一同中座せず、飲を盡して退散せり、實に未曾有の盛會なり」とあり、安田が大いに満足していたことがわかる⁽¹⁸⁾。2月24日の『東京日日新聞』は、安田が東京府知事・大少書記官、正副議長、諸議員を横網別邸に招き、観世・梅若などの能を興行、点茶式もあり、と伝えている。このころ、新興実業家の大宴会を新聞等のマス・メディアがしばしば報道している。大宴会は、実業家としての勢力をアピールできる場であったと言える。

盛大な宴会が開かれたあとの3月25日、安田は宇都宮地方への旅行に出発している。この旅行の目的は、代理店や支店の訪問であったが、『全伝』を見る限り、茶道具の購入が主たる目的であったようだ。3月30日、野村瀧澤氏を訪問し、酒食の饗応を受け、古書を鑑賞する。その後、宇都宮で伊藤氏に面会し、氏から華山椿山の巻物、芳齋の小画帳、明清の書画幅数軸を譲り受ける。31日には、郡長森岡興氏に面談し、道具屋から抹茶道具を購求し、鈴木氏と茶事を談じる。4月1日、栃木支店へ赴き、栃木の日野屋庄七氏から、容齋六高僧、鐵翁山水、銅風爐、錫銅徳利、印籠を、また、文古堂から香合、茶碗の類を買い入れる。2日、夕刻より、支店員、鈴木・黒田・若林・鷺尾・木下の五名を茶会に招待。5日に帰宅。まさに茶事旅行であったといえよう。

明治13年代の安田の社交活動はきわめて多様であり、まさにハイカルチャーを求めて四方に触手を伸ばすかのようである。5月22日、午後3時から、彼は大木喬任参議の夜会に出席している。この夜会は、三条公らの参議々官や各国公使ら、300余名が出席した大規模なもので、陸軍軍楽隊の奏楽、花柳壽助らの演戯、模擬店などがあつた。『全伝』は、「尤も愉快であつたのは、参議大木喬任伯と参議西郷従道侯との綱引に至つては当日の壓巻であつた」と、安田の満足ぶりを記している⁽¹⁹⁾。

のちにハイカルチャーの核となる能楽にも、この時期に安田は接近している。先に少し述べたように、6月16日に安田は謡曲の稽古を始めた。

「豫ねてから謡曲の家元寶生九郎氏を後援して居た關係上、君は今日から夫れを習い始めた、丁度大木伯から招待せられた翌日であつたが、横網別荘で小林、小杉の両氏が茶会の後、『熊野』、『松風』の二番を謡はれたので、君は其『熊野』からはじめることにした。」⁽²⁰⁾

謡曲への接近は安田の趣味の一大転換を示すものであつたらしい。『安田善次郎伝』は、その事情を端的に記しているため、引用しておこう。

「同年夏より又宝生流の謡曲の稽古を始めた、氏は壮年の頃、頗る俗曲に巧で、富本などは得意であつたが、其の品のわるきを感じたと見へ、中ごろから之を見合せたりしが、此れの頃に至り高尚なる能楽に其の心を向け始めた、右は自己の位置の高まるに顧みる所があつたためと、又一族店員社員の若手共に、何等か音曲上の趣味を与ふるには、謡曲が最も上品にて弊害少しと考へたからである……」⁽²¹⁾

安田は後に、旅先での余興として、実業家仲間と謡曲の会を頻繁に催すことになる。たとえば、明治17年8月18日、北海道旅行の道中、函館にて、「公園内の協同館で、富岡、平岡両氏と洋食を喫し、折柄来訪された大脇彌教氏と、『熊野』、『藤戸』の二番を謡つた」⁽²²⁾とある。31日は函館で、「午前中は三井、山田、富岡氏等と謡曲に過し」とあり⁽²³⁾、この時期には謡曲が彼の趣味として定着していたことを窺わせる。

また、茶道の家元とも、安田はこの頃、多少、接触している。13年8月20日、安田は旅行で京都にやってきた。この日の夕方、彼は市川市十郎、嵐璃笑等の歌舞伎を鑑賞している。そして、『全伝』では、翌8月21日、「九時頃から千宗室、千宗左の二家を訪ふた」⁽²⁴⁾とある。寺院観光をはさみ、28日には、「朝から千宗左氏を訪ひ、紫野の大徳寺、桂御所を見物した」とある⁽²⁵⁾。千家と親交を結んだとは言えない旅先でのひとこまであるが、彼の茶事に対する関心の高さをうかがい知ることができよう。

さて、安田の旅行について、一点、補足しておこう。安田は生涯、一度も海外を訪れたことがなかった。ただし、国内は頻繁に旅行しており、かなりの旅行好きであったと言える。先の明治17年の北海道旅行では、東北の各地をも訪れている。この旅行は、天皇の巡幸に触発されたものではないかと思われる。天皇は、明治9年の巡幸では函館周辺にしか立ち寄らなかつたが、明治14年の巡幸では、小樽・札幌・室蘭・函館を訪れている。安田が8月14日に昼食をとった札幌の豊平館は、しばしば、内外貴紳来遊時の宿泊所となっており、天皇の行在所にもなったという。また、彼は、9月13日には松島から鹽竈神社へ行き、中門の扁額の有栖川熾仁親王御筆「東北鎮護」の四字を見ている。これは明治14年の巡幸で帯同した親王が書いたものだ。巡幸の跡を追う旅は、安田による明治30年代の地方支店廻り、支店の綱紀肅正の活動に投影されるように思われるが、邪推であろうか。

3 社交の拡大と変質

(1) 交際範囲の拡大

明治10年代後半以降、安田の華族・貴紳との交際は広

がり、また、茶事への傾倒は度を増していった。『全伝』の記録をもとに、10年代後半をたどってみよう。明治17年11月1日、2日の別荘新築落成の祝宴は、二日にわたる大規模なものであった。一日目は、親類・知己を招いた祝宴で、余興は藤間の手踊であり、舞子は皆、衣装をつけて演じたという。来客は70名ほどであった。二日目は、第三国立銀行、安田銀行、第四十五国立銀行の社員、総計84名を招待しての宴会を催した。この新築落成の前後から、馬越恭平や益田克徳らの茶会への出席が頻繁になり、前田家との交流も多くなる。12月15日には、前田家の招待で、善助、善郎ら一門とともに下谷松源楼の宴会に出席している。芸妓が数名、余興は講談であった。その日、金貨十五万両を、前田家から買い受ける約束をしたという。

明治18年は、茶事への傾倒が著しい年であった。元旦は次女暉子に抹茶を立てさせ、10日は星野氏の茶会に出席。なかでも、20日から始まる短期間での8回におよぶ茶事は尋常ではない。20日は隠宅で近親者のみの茶事。21日は別荘で第二日目の茶会を催し、星野、松浦恒、等の諸氏が来会。22日は、加藤、條野諸氏を招き、第三日目の茶会。23日は、三井武之助、益田克徳らを招いて第四日目。24日は第五日目で、東久世等の五氏。26日は第六日目で馬越ら、後座は謡曲。28日は第七日目の茶会で松浦詮、南部信民、脇坂ら六氏を招待。2月4日は第八日目で山本誠之ら諸氏。実は2月1日、八百松楼にて、安田は第三国立銀行の得意客百七十八名を招待して宴を開き、昨年末から安田が銀貨相場で大損をしたとの風評があるが、それは事実無根であることを弁明している。連日の茶事も、財政安泰のアピールになったに違いない。金融機関の信頼性を伝える一種のメディアとして、茶事、およびさまざまな宴は重要な手段であったのではないか。その他、この年は謡曲会を何度か別荘で開催したり、また逆に同様の会に招かれたりしているが、その詳細は割愛しよう。

明治19年は、いわゆる貴紳との交流が多い年であった。6月6日午後二時から横網別荘に毛利元徳侯・同夫人・若夫人を招待しての晩餐の宴を開き、余興には堅田連の手桶等を盛り込んでいる。同月19日には、松方正義から招待され、晩餐会に列席し、余興には圓朝の落語や琴曲があった。『安田善次郎伝』には、善次郎の手記がわざわざ掲載されている。

「六月十九日、午後六時より、三田松方侯に招かる、相客は武井守正、小林年保にて、余興には圓朝の昔話、琴曲等にて十一時半退散した、此の日は天気晴朗にして、主人公の先導にて、庭園中を逍遙するに、新樹鬱蒼、池水澄明、洒掃の行届きたること、広馬場の結構、花園の美麗等、愉快千万なり」⁽²⁶⁾とあり、善次郎の満足のほど

が伺える。同月26日は、大木元老院議長の招待で、夫人、暉子、善四郎同伴で、芝区の別邸を訪問している。晚餐の饗応があり、令嬢三名による琴の演奏、歸天齋正一の手品等でもてなされた⁽²⁷⁾。12月19日には、深川区にある前田侯別邸での鴨狩りに招待され、善四郎・善助・善郎・政定の四名を同伴して訪れている。善四郎が二羽、善次郎が一羽捕獲し、獲物の鴨は早速料理された。『安田善次郎伝』に記された自筆日記には次のようである。

「十二月十九日、老生今曉八時より、深川小田新田の加州侯の御控邸に於て、鴨狩の御催の御招待を受け、生、善四郎、善助、善郎、政定、の五名参候す、……夕五時頃まで、四十七羽を獵す、終つて平清に臨み、晩食の宴会あり、……此の日天気晴朗にして、何れも未曾有の愉快をなせり、主公を始め、接待の諸氏と共に、手綱を以て東西を奔走し、又は海岸の堤上を逍遙して、養龜場を見物す、十分に運動して手料理の酒飯を喫す、其の美味筆紙に尽し難し、各自十分の愉快を極め、八時半帰宅す、鴨二十七羽、小鴨七羽、を持帰る、小鴨は主公主獵の分なり。」⁽²⁸⁾

『安田善次郎伝』にもコメントがあるように、この頃は上流社会から手厚く遇された時期であった。次の明治20年代、近親者や財界関係者、あるいは得意客を招いての園遊会、乗馬会、華族を含む貴紳の別荘への訪問等々、安田の交際はとても華やかなものとなった。明治24年の年賀回りには、伏見宮殿下、松方大蔵大臣、川田日本銀行総裁、前田公爵家、前田伯爵家の五箇所を訪れているが、この頃の安田の交際圏が垣間見えよう。

(2) 社交手段としての馬術

さて、ここで安田の社交に欠かせなかった乗馬の趣味について少し記しておこう。彼は明治21年(安田は当時、51歳)には馬術の練習を始めていたとみられる。明治23年ごろから、長子善之助ら、親族の若年者にも馬術を練習させている。『全伝』には、23年1月4日、「愈々一族の少年に乗馬練習を為さしむることゝなり、本日より善之助、芳次郎、善吉、定吉、幸次郎、彦次郎、卯三郎の七氏が下谷同練習所に通ふ事になつた」⁽²⁹⁾とある。その後、善次郎は毎日のように善之助を伴って近郊へとでかけ、乗馬の技術を磨いた。安田は馬術練習所へも通い、松平信正、上杉茂憲、前田利同らとともに馬術を習っている。明治24年には二級に及第し、27年には卒業証書を授与されている。馬術は華族たちとの格好の社交手段であった。明治24年の5月31日には、馬術練習所の創立七周年記念日で、前田、上杉、松平らの発起で記念宴会が開かれ、伏見宮貞愛親王らとともに安田も出席している。その他、前田利同の馬談会という宴会などに安田は積極的に出席している。明治26年、27年ごろは、安

田の馬好きが高じた時期で、毎朝一時間あまり、馬で近郊を走らせたという。ときどき、そのまま職場へ出勤したともいう。明治26年は、1月2日から稽古始めとして、邸内の馬場で乗馬の稽古をしている。また、3月8日は、伏見・閑院両宮のお供をして、田端村田村利七氏の別荘へ騎乗で赴いている。上杉、前田、松平、などの諸氏とともに、計18騎での同行だったという。同年10月7日には、上杉伯、清棲伯、前田伯、松平子など、乗馬の友人を園遊会に招待している。

(3) 交際の質的变化

明治30年代になっても、安田の社交の華やかさは基本的には変わらない。松浦伯爵主催の茶事、大隈伯爵の宴会、小松宮殿下主催の能楽会、三井八郎次郎氏の茶事等々、数多くの会合に参加し、謡曲会ではシテを務めたりもしている。しかし、明治33年、ないし34年から始まる数年間は、ハイカルチャーに対する彼の関わりかたに大きな変化が見られるようになる。一方で安田は頻繁に茶事を催し、また、茶事仲間が催す茶事に頻繁に出かけている。しかし、他方で、儉約・質素・勤儉といった生活態度上のコンセプトをさまざまな機会にアピールし始める。

明治34年5月21日の『国民新聞』によれば、熊本に赴いた安田は、当地の支店を抜き打ち点検し、非効率的な作業や業務の遅さを注意してまわり、店員に嗜好品としての煙草を禁じたという。また、安田が毎年一月に社員・行員に与える訓戒では、勤儉貯蓄のコンセプトが明確に打ち出され始めた。そして、この訓戒は徐々にメディアに注目されだした。明治35年1月9日の『中外商業』は、「安田善次郎一族郎党を招集して吉例の勤儉貯蓄論を一席」という見出しでこの年の訓戒を掲載している。

「勤儉貯蓄の事は人間処世第一の要務なるは、誰しも熟知なれ共、其實行は随分六ヶ敷事であります。

此難事をたやすく行ふには、昨年の春諸子に御話致したる如く、順序を立て、徐々習慣となし、知らず識らずの内に実行する様致したいものであります。」

こうして始まった訓戒で安田は、「順序を立て励行」することは、言い換えれば「順序を正し、勤儉以て世に処する」ことであり、一年間、これを試みた者は、すでに「習ひ性」になったはずだと述べて、社員たちに勤儉の態度の継続を強く奨励している。また、「勤儉以て世に処するものは、一時に巨万の身代とならずといへども、人に求る心あらざれば、おのづから高尚にして野卑ならず、本務に忠実なるが故人の用ひもよく、朋友に信義を欠かず、父母妻子に安神を与へ、家内和合して子孫長久疑ひなき事と存じます」などと述べ、公私にわたる処世訓として、勤儉の態度を位置づけている。

「順序的の処世は如何にも迂遠なりとて、所謂豪傑肌には一攫千金の射倖心より、投機事業に心を傾けるものは平常の挙動粗暴となり、華美を好み外見を飾り、徳義を顧みず……」。

投機事業や華美な生活態度にたいするこのような戒めは、勤儉王、安田の処世訓として広く知れ渡るようになった。

もうひとつ、メディアに現れた安田像を示しておこう。明治34年に出版された『実業家偉人傳』（活動野史著、四書房発行）という実業家の叢伝には、渋沢栄一や大倉喜八郎らとならんで安田に関して数頁の記載がある。ここでは安田が並みいる富豪の豪華な日常生活に掉さすアンチ・ハイカルチャーの人物として描かれている。

「此時に当りてや豪奢の風潮は漸やく天下に瀰漫し所謂紳商なるもの殊に甚だしとす而して親睦会なるものは此の間に流行し動もすれば親睦を名として酒宴を張る交際の広きもの、如きは今日も親睦会明日も懇親会にて殆んど其費に堪へざらんとするものあり善次郎の勤儉なる風此の風習を嫌ふ是に於て善次郎は鴻嘆大息して曰く「ア、方今親睦会の名其の実に適はず是れ徒づらに無用の金を費やし無益の時間を消するのみ亦何の得るところ之れあらん上流紳士の輩にして此の如し下流の徒漸やく将さに之れに倣ふて勤儉の美風地を払はんとすア、我れは斯る時流の好尚に倣ふを欲せず故に今より後ち親睦会は都て之を辞し其の費を積んで不時の事に備へん」と遂に同志と相謀りて以て共済五百名社なるものを設く……」⁽³⁰⁾

親睦会・懇親会の流行など、「紳商」の「豪奢の風潮」は著しい。金銭が浪費されるこれらの会は、親睦・懇親の本来的な趣旨からはずれていると、善次郎は考えている。むしろ会費制にして、会員が死去した場合、その家族に贈る救恤金の一部として会費を活用するのがよい。こうして安田が作ったのが、五百名社である。このように、『実業家偉人傳』は善次郎の発想を持ち上げ、勤儉実業家・安田の道徳的な一貫性を伝えている。

しかしながら、この時期に勤儉のアピールを集中的に行った安田のタイミングのよさには注意すべきである。明治33年4月29日以来の二六新報による三井バッシングは、安田に拍車をかけたに違いない。二六新報は連日、「三井一家の乱行」などの記事を掲げて三井一族の豪華な生活の腐敗振や経営の問題性を強調した。かつて風評被害に遭った経験がある安田は、こうした情報には敏感であった。これまで安田は得意客の接待をつうじて営業上の信用維持を図ってきたが、それとは異なる新しい防衛戦略を安田は考えなければならなかった。安田の戦略性については、先の叢伝と同じ時期に出版された別の叢伝、『成功秘訣富豪の面影』（桑谷定逸著、実業之日本社、

明治35年出版）に、きわめてシニカルな記述がある。著者・桑谷は、岩崎弥之助を、「文明的紳士にして東洋的豪傑にはあらざるなり」⁽³¹⁾とするが、安田に対しては手厳しい。少々長くなるが引用しておこう。

「人は彼を目するに品行方正なる模範的紳士を以てす、然り、単に足を柳巷花街の地に入れざるの一事を以て品行方正と謂ひ得べくむば彼れ亦謹嚴なるセントルマンの好標本、唯奈何せむ「品行方正」の要素としては単に此の一事を以て足れりとせざるなり…中略…彼の平生を以て之を見る、彼が折花攀柳の不徳を鳴らして大に社会を警戒せしは、彼が天資の端嚴なるより出でたる自然の声にはあらざりき、真実世道人心の頹廢を憂へて之を濟度せむとの赤誠より出でたる天使の声にもあらざりき、彼は其の営業上の必要より已むを得ずして之を声言せしなり、而して其の之を声言するやあ恰も時期の宜しきを得たるものありしが故に、社会は忽ち彼を謳歌して以て一世の好紳士なりと持囃せり、即ち彼が其の部下を戒めて花柳の巷に出入する莫からしめたるは、時恰も銀行会社員等の不正事件続々暴露して世人も其の弊に堪へず、夫の繁絃急竹一擲千金的の東洋豪傑風亦漸く社会より排斥せられむとするの際なりき、此時に当りて彼が之を声言したるは、一は其の自衛上より出で、一は時運の潮流に逆らはむことを恐れたるより出でしなり、…。…中略…是より先き明治十三四年の頃、彼が同志の徒と共に組織せし共済五百名社なる者の趣旨とする所は、府下の紳商輩が名を親睦会に仮りて互に豪奢を衒ふの弊あるを嘆じ、其の費を蓄積して以て子孫の計を為さむとするに在りしと伝ふれども、是れ亦自家の利益を打算して例の節約主義より割出したるもの、固より夷齊の事にあらず、以て我が論拠を打破するに足らざるなり。」⁽³²⁾

「折花攀柳の不徳を鳴らして」といった安田の戒めは、「営業上の必要より已むを得ずして」発言したに過ぎない。「あ恰も時期の宜しきを得たるものありしが故に、社会は忽ち彼を謳歌して以て一世の好紳士なりと持囃せり」という指摘は重要である。先の『実業家偉人傳』における安田賛美も、安田の思うつぼなのである。安田は「自衛」の戦略に長けていた。そして、こうした戦略のなかで、彼はハイカルチャーに対する関わり方を微妙に変化させていった。安田が会員であった茶事同好会に和敬会という会があったが、明治33年1月に定められたこの会の規約は、安田による勤儉のコンセプトに合致しており、ハイカルチャーに対するその後の彼の関与の方向性を決定づけたと言える。次にその規約の一部を掲げておこう。

和敬会規約

一、和敬静寂の本旨を守るべき事。

一、器は新古を選ばず結構を好むべからざる事。

一、食は淡薄を主として厚味を備ふべからざる事。

珠光曰茶は遊に非ず芸にあらず又放坐に非ず一味清浄法也。

……中略……

宗關居士曰器は愛して風情を好むは形容をのみ楽しむ数寄者也。

……中略……

又曰見せものに仕候へば実より虚になり申候右様のしな候故真実も道理も失ひ申につき茶道は諸道の悪魔になり又奢の根本にも罷成申候。

右先師の遺訓を遵守し相互に和平礼を正く懈怠の邪念を退け斯道の清閑雅趣を楽しみ交友の信を存せむことを約すと云。

明治三十三年一月

和敬会は三井八郎次郎、東久世通禧、松浦詮、久松勝成らを会員とする格式高き茶事の会であった。茶事の中の質朴清貧な要素を、安田はこの時期、いわば発見し、勤儉貯蓄のコンセプトとのあいだに内的な調和を見出したのではないだろうか。また、偕楽会という社交の会では、安田が中心になって勤儉指向の記念誌が編纂されている。この会は有力な富豪が集まる会であり、安田は明治9年から大正年間まで参加していた。明治37年に、会員の写真と筆跡を集めた書誌・偕楽帖が作られた。そのときの会員には、三井高保、中村清蔵、近藤廉平、園田孝吉、益田孝、大倉喜八郎、加藤正義、渋沢栄一、馬越恭平、高橋是清、浅野総一郎たちがいる。安田は次のような序文を書いている。

偕楽帖序文

友人相見へ談笑するは楽之に如くものなし、況んや其志を同ふするもの相会し、談笑の間に見聞を交換し、兼々積日の勤勞を慰する吾が偕楽会の如き、蓋し其最なるものか。

斯会や実業有志の集る所、党を作らず、派を立てず、和氣霽々能く胸襟を披いて、款晤す、其談ずるや、主として、経済実業に係り復た政治に及ばず、其樂むや、豪華を衒はず、貧素を旨とし、清遊を期す、畢竟其本分を逸せざる為なり、真に之を後進に伝えて妨げず、又老人に示して、不可なしといふべし、宜なり、明治九年以来今日に至る、二十有余年、曾て衰ふる事なし、尚長へに、隆盛ならんとす。……中略……

明治三十七年晩秋 勤儉堂 安田善次郎識

この冊子をどれほどの人が目にしたのか、また、偕楽会の会員たちが安田のこうした社交思想に共鳴したのか

どうかも、今となってはわからない。ただ、「其樂むや、豪華を衒はず、貧素を旨とし、清遊を期す」と表現される勤儉指向を、機会をとらえてアピールする必然性を、安田が感じていたのは確かであろう。ただ、安田はその後、華やかな社交の舞台から去っていったわけでは決してない。明治30年代末、そして明治40年代、園遊会、観桜の宴、各種の茶会等々、安田の交際は継続していく。社交の外面的な華やかさと内面における勤儉的態度は、安田のなかでは矛盾しなかった。しかし、常に、勤儉的態度を外部に印象づける必要性を安田自身、自覚していたに違いない。明治40年代に入ると、安田は自身の勤儉思想や勤儉実践法を口述書や著書などのメディアで公にしていこうとした。華美に流れる世の風潮を憂い、青年に修養・克己・奮起を勧めるという筋書で、それらは首尾一貫している。社交が継続する限り、たえず質朴振りをアピールすることが、安田の防衛的処世術であった。

4 おわりに

安田善次郎は、いわば才覚本位の時代において経済的成功を勝ち得た者が、社会的な圧力やルサンチマン、相対的不満などをいかにかわすかという大きな課題に、いわば正面から取り組んだ実業家だと言えるだろう。成功者による、社会的圧力の「かわし」、戦略、富や成功の隠蔽、不幸・貧乏ぶりといった文化が、明治期日本に具体的な形をもって現れたのである。その典型例が安田の清貧ハイカルチャーであった。清貧ぶりを装い、リッチなイメージを隠蔽する一方で、金持ち文化としての威信を保つという微妙なバランスのなかで実業家たちの文化は成立した。しかし、そうした文化も大正後期からは再び変容していく。安田は大正10年9月28日、別荘で暗殺される。彼の暗殺に象徴される世相の変化と実業家文化の変質については別の機会に論じたい。

註

- (1) 矢野文雄、『安田善次郎傳』、安田保善社、大正14年、462-464頁。以下の註では、『善次郎傳』と略記。
- (2) 前掲書、および、『安田善次郎全傳』（私家版）第一巻参照。以下の註では、『全傳』と略記。
- (3) 三井家等、明治・大正期における実業家文化の概説としては、拙稿、「実業家文化の戦略と形式」、青木保他編、『ハイカルチャー』、岩波書店、2002年を参照。
- (4) 『世外井上公傳』、第三巻、119-120頁。
- (5) 以下、『岩倉公實記』、626-7頁。
- (6) 『善次郎傳』、238頁。
- (7) 『全傳』、244-5頁。

- (8) 『全伝』, 245頁。
(9) 『全伝』, 246頁。
(10) 長井實著作兼発行, 『自序益田孝翁傳』, 昭和14年, 213頁。
(11) 高橋義雄, 『近世道具移動史』, 慶文堂書店, 昭和4年, 82-3頁。
(12) 『善次郎傳』, 293頁。
(13) 前掲, 『近世道具移動史』, 68頁。
(14) 『全伝』, 237頁。
(15) 『善次郎傳』, 243頁。
(16) 前掲, 『近世道具移動史』, 72頁。
(17) 『全伝』, 262頁。
(18) 『全伝』, 卷之參, 266頁。
(19) 『全伝』, 263-264頁。
(20) 『全伝』, 264頁。
(21) 『善次郎傳』, 244頁。
(22) 『全伝』, 357頁。
(23) 『全伝』, 365頁。
(24) 『全伝』, 273頁。
(25) 『全伝』, 274頁。
(26) 『善次郎傳』, 310頁。
(27) 『全伝』, 440-1頁, 『善次郎傳』, 312頁。
(28) 『善次郎傳』, 331-2頁。
(29) 『全伝』, 553-4頁。
(30) 活動野史, 『実業家偉人傳』, 四書房, 明治34年, 112-13頁。
(31) 桑谷定逸, 『成功秘訣富豪の面影』, 実業之日本社, 明治35年, 48頁。
(32) 前掲書, 107-108。